

## 30年で山の鳥類相はどう変わったか？ —大文字山の場合—

中島 拓（日本鳥学会）

### はじめに

「五山送り火」が行われる山として、あまりにも有名な大文字山。30年以上も前、この大文字山を舞台に一人の大学院生が鳥類相把握のための調査を行っていました。当時の調査結果をみると、およそ一年の調査で45種が確認され、多様な鳥類が生息していることが明らかとなりました。

人が山に入らなくなったことで里山の荒廃化が叫ばれている昨今、大文字山の鳥類相にも何か変化が現れているかもしれません。あれから34年の歳月を経て、大文字山の鳥類相を改めて調べてみました。

### 調査方法

京都府左京区の大文字山において、ラインセンサス法による鳥類相把握のための調査を行いました。ラインセンサス法とは、あらかじめ定めたルートをゆっくりと歩きながら、出現した鳥類の位置や個体数を記録する方法です。調査期間は2008年3月から2009年4月のおよそ1年とし、おおむね1ヶ月に1回程度の頻度で合計14回の調査を行いました。

なお、過去の調査は、1973年5月から1974年8月までの間に合計26回行われています。

### 結果

今回の調査では、合計50種の鳥類を確認しました。過去の調査では45種が確認されており、確認種数には大きな違いはありませんでした。

一方で、確認頻度が低下した種として、冬鳥のツグミやカヤクグリ、ミヤマホオジロ、留鳥のホオジロなどが挙げられました。また、確認頻度が上昇した種として、夏鳥のキビタキ、オオルリやサンコウチョウ、冬鳥のクロジやシメなどが挙げられました。

また、特定外来生物のソウシチョウは、前回全く確認されていませんでしたが、今回は冬に確認しました。

### まとめ

34年前と現在の鳥類相を比較した結果、その組成に大きな変化はみられず、現在も多様な鳥類が生息していることが明らかとなりました。

しかし、ホオジロやカヤクグリなど灌木の茂みや草地に見られる種が減少し、キビタキやサンコウチョウ、クロジなど比較的良好な樹林に生息する種が増加したことを考えると、植生遷移や樹木の生長に伴う微環境の変化が鳥類相にも影響を与えているのかも知れません。